木製品にみる古代人のくらし

はじめに

昔から木は道具の素材として多く用いられてきたと考えられますが、遺跡においては、木のほとんどは腐ってしまい、発見される機会も多くはありません。しかし、近年、山梨でも低地帯の遺跡や火災にあった竪穴住居の発掘調査が増加し、少しずつですが発見例も増え、当時の生活の様子も徐々に分かってきています。

遺跡から出土する木製品には、狩猟・漁労具、農具、工具、容器、食事具、紡績具・編具、運搬具、服飾具、武器・武具、祭祀具、葬送具、建築部材、土木部材、文房具、遊戯具、楽器、調度具等が見られます。これらの中で山梨県埋蔵文化財センターがこれまでに行ってきた発掘調査で発見された資料を通して、土器や石器だけでは分からなかった昔の人びとの生活の様子など、山梨の気候風土の中で培われてきた木の利用や人と木との関わりの歴史について時代ごとに紹介いたします。

木工文化のあけぼの

今からおよそ1万5,000年前頃からは、気候温暖化に伴う海面上昇で暖流が対馬海峡を通って日本海に流れ込むようになり、降水量（降雪量）が増加したと考えられます。これに伴ってそれまでのモミ属やコメツガといった針葉樹の森は関東以西では、コナラ、クリ、クヌギなど、東北地方にかけてはミズナラやブナなどを主体にした落葉広葉樹林へと変わりました。このような植生変化は食糧（木の実）資源の増加をもたらし、また原料（木材や樹皮）やエネルギー（燃料としての材や樹皮）としての木の利用も活発化したことでしょう。日本列島における縄文文化は、このような植生や環境を背景として成立し、人びとは一定の場所に落ち着いて、安定した生活をはじめるようになったと考えられます。

木の個性

木はその種類によってさまざまな特性を持っています。出土品をみると、容器類にはヤマグワ、イヌガヤ、ケヤキ、サクラ、クワ、ヒノキなど、石斧の柄にはユズリハ、サカキ、ヤブツバキ、シイノキなど、弓にはカシ類やカエデ類、カヤなど、農具にはアカガシ、シラカシなどのカシ類が多く用いられています。このような樹種選択は地域や時代によって差異がみられますが、縄文時代以来、人びとは木材の加工法や、出来上がった製品の用途に応じて、色合い、堅さ、しなやかさ、吸湿性など、どの種を用いるか、また1本の原木のどの部分を使うか、さらに木目に対してどの方向に木取りするかを長年の間にほとんど知りつくしています。『日本書紀』巻第一神代には、素戔嗚尊（すさのおのみこと）が木の選択に関して「杉およびクスノキは浮宝（うくたから）：船にせよ。檜は端宮（みつみや：めでたい宮）を作る材料にせよ。・・・」と記しており、古代には木を選ぶことが確立していたことを物語っています。私たちの身のまわりにある木製品のなかにも、櫛はツゲ、下駄はキリ、擂粉木はサンショというように、製品によって樹種が決まっている例が数多くみられ、今日まで引き継がれています。

木工技術の移り変わり ～石の工具から鉄の工具へ～

旧石器時代には、骨角・皮細工用や木材加工用の工具として使用されたと考えられる局部磨製石斧なども存在しますが、これらで製作されたもので、今に残るものはきわめて少なく生活の中の木製品の役割などが語られるほどのものではありません。

縄文時代には、全体を磨いた磨製石斧で木を伐採し、細部は小型石斧などを使用し、刳り抜くなどの加工により、刳物椀や鉢などが作られます。

弥生時代には、稲作技術と共に、太型蛤刃石斧（伐採用）、柱状片刃石斧（細部加工）、扁平片刃石斧（細部加工）が中国・朝鮮半島を通じて伝来し、縄文時代の斧に比較すると機能の細分化が計られたといえます。このことは、農

耕社会が成立し、木製農耕具の製作や灌漑に木材の需要が高まったことと密接な関係があったと考えられます。また、弥生時代の中頃から徐々に**斧が石製のものから鉄製のものに交替**をはじめ、細部加工の道具も**ノミ、刃子（ナイフ）、ヤリガンナ**などの鉄製工具に替わります。弥生時代後期に伝来した**ロクロ**と**ロクロガンナ**とよばれるヤリガンナ（木を平坦に加工するための工具）の系譜をひく鉄製工具により、回転を利用して挽くといった石器ではなしえなかった新たな木工技術が生まれ、**挽物椀**や**皿**などが作られるようになりました。

縄文時代の石斧 一の沢遺跡（縄文時代中期）

古墳時代には、これに**鋸**（弥生時代までの割る、削るというための工具とは異なった木工具）が加わり、薄板を曲げて作る**曲物**が制作されはじめます。伐採や加工用の**横挽き鋸**（木を輪切り方向に切る）が先に現れ、製材に使われる**縦挽き鋸**（木目にそって切る）は、**中世（13 世紀）以降**に遅れて出現するとされています。縦挽き鋸は、当初、中国から移入された２人挽きの「**大鋸**」とよばれ、板材をより効率的に得ることが可能になり、**結桶**や**結樽**が作られました。これらの新しい容器は大型で、しかも運搬に適したことから、味噌・醤油・酒などの醸造業の発達に大きく貢献しました。さらに縦挽き鋸には、**15 ～ 16 世紀**にかけて日本独自の一人挽きの「**前挽き大鋸**」が登場し、**江戸時代**に急速に普及し、近年まで使用されていました。この「前挽き大鋸」の出現によって、それまであまり利用されなかった槻や楓・桜などの広葉樹も建築材や細工材として利用できるようになり、木材の利用範囲が飛躍的に拡大し、建築だけでなく、日本文化にも大きな影響を与えました。

轆轤（ロクロ）手引きの図

また、「前挽き大鋸」の出現によりヤリガンナの必要性がなくなり、替わって**台鉋**が出現します。ノミも両刃から片刃へと移行し、建築だけでなく、木材を原材料とするさまざまな木製品の発展に大きく寄与しました。

近世には、建具職や桶屋などの職人の専門化がすすみ、それぞれの職に応じて、木工具が細分化さるようになりました。

人と木との関わりの歴史

縄文時代

県内の発掘調査では、木製品が確認された例は今のところありませんが、木の道具の存在を間接的に示すことができる遺物として**石鏃**をはじめ打製や磨製の**石斧**など木に取りつけて使用する石器などが数多く出土しています。また、**竪穴住居**の柱には材が用いられ、壁は枝で補強され、屋根は草葺き、床には植物で編まれた編物が敷かれた状況が考えられます。とくに縄文時代にあって**籠**や**編物**が盛んに用いられたことは、土器の底に残る**網代痕**などから分かります。これは土器製作にあたって土器の下に敷いた敷物の跡がついたもので、土器の底部が地面などに付着するのを防ぐとともに、敷物をロクロのように使ったものです。

この他に木の活用事例として北杜市甲ッ原遺跡から発見された**漆彩文土器**や**コハク垂飾**があります。**漆彩文土器**は

網代痕 塚越遺跡（縄文時代後期）

漆彩文土器 甲ッ原遺跡（縄文時代前期）

コハク垂飾 甲ッ原遺跡（縄文時代中期）

縄文時代前期（今から約 6,000 年前）で、器表面全体にベンガラ漆を焼き付け塗布した後、漆（くろめ漆）で文様が描かれています。**コハク垂飾**は、縄文時代中期（今から約 5,000 年前）で、紐を通して、現在のネックレスのように使われたと考えられます。コハクは太古の樹木が分泌した樹脂が地中に埋もれ変化してできた、いわば樹脂の化石です。国内では北海道石狩地方・岩手県久慈市・福井県いわき市・千葉県銚子市・岐阜県瑞浪市など限られた地域でのみ産出され、甲ッ原遺跡で発掘されたコハクは、福島県いわき産の可能性が高いという分析結果が得られています。このことから、私たちが想像する以上に縄文人が広域な地域の人々と交流していたことがわかります。県内では、甲ッ原遺跡以外にも、金の尾遺跡（甲斐市）、一の沢遺跡（笛吹市）、酒呑場遺跡（北杜市）などでコハク製の遺物が見つかっています。

弥生時代

弥生時代の初め、日本に稲作農耕技術がもたらされたことに伴って、従来日本列島になかった農具が出現します。県内では、身洗沢遺跡（笛吹市）で弥生時代後期の水田跡とその周辺から多くの**農具**が出土しています。**鍬**（未製品）や**又鍬**は土地を耕し、**横鍬（エブリ）**は土をならし平らにするために使われました。鍬の**膝柄**は、膝が曲がったように枝の分岐を利用してつくられています。また、弥生時代になって登場する武器形木製品の一つである**剣形木製品**も出土し

鍬（未製品）

又鍬

横鍬（エブリ）

膝柄

剣形木製品

漆塗竪櫛

ており、儀式用に使用されたと考えられています。この他に古墳時代初頭とされる**漆塗竪櫛**（細竹を束ねて折り曲げたもの）も発見されています。

油田遺跡（南アルプス市）では、弥生時代後期（今から約 1,700 年前）と考えられる**竪杵**が出土しています。推定長 84cm、最大幅 7.2m で、丸太の中程を手で握られる位の太さに削ったもので、その部分を持って上下に動かして、臼の中の穀物をつき、脱穀などに使われた道具です。稲の刈り取りは、稲の成長にばらつきがあるため**石包丁**で穂摘

「脱穀する様子」

竪杵

穂を刈る様子

みされ、そのまま臼に入れ竪杵でつき、籾殻を取り除き玄米にしたと考えられています。まさに、下のような銅鐸に描かれている竪杵が実際に使われていたことがわかります。弥生時代の竪杵は、静岡県の登呂遺跡をはじめ佐賀県から宮城県まで、各地から出土しています。

平野遺跡（増穂町）では、弥生時代後期（約 1,700 年前）を中心とする集落跡が発見され、25 軒中、12 軒の住居跡からは壁面や床面などに火災を受けたようす（**焼失住居跡**）が見られ、木材を組み合わせた状況が分かる炭化材も確認されています。これらは、様々な支配権をめぐるムラ同士や地域間での戦いに伴うものと住まなくなった住居を廃棄するために焼いたのではないかとする説が考えられています。

焼失住居跡

炭化材検出状況

古墳時代

銚子塚古墳（甲府市）は、全長 169 m の前方後円墳で 4 世紀後半代に造られ、当時の甲斐を束ねた最高首長の墓と考えられています。この古墳の後円部墳丘裾に木の柱（**立柱**）が立てられていました。大きさは直径 20cm、長さ約 90cm で、スギを用いており、長く柱としてもたせるためにわざと木の芯をはずして加工されています。柱はほぼ円形の断面ですが、よく観察すると**斧**か**手斧**で縦方向に 14 ～ 16 面に削られています。銚子塚古墳からは**鉄製斧**が、また、近くの大丸山古墳からは**斧**や**手斧**が出土しているので、その関係に興味が持たれます。この立柱は地中に残された長さが 90cm ありますが、本来は 2 ～ 3m 程地上に出ていた部分があったと思われ、地上に出ていた部分は次第に腐って倒れたものと考えられます。

立柱の周辺の周溝内からは、**円盤状木製品**、**蕨手形木製品**、**棒状木製品**が出土しており、立柱とともにマツリに使われたものと考えられます。これらの木製品は出土状況から一つに組み合わされて使われ、しばらくの間、古墳に立てられていましたが、その後、周溝の中に投げ込まれたものと思われます。これらの木製品は立柱とともに現在のところ他に例のないものとして注目されています。

木の埴輪と思われる**笠形木製品**も出土しており、古墳に土で焼いた埴輪のみが立てられていたという、これまでの古墳に対するイメージが変えられてきたのです。また、立柱は、これまでの古墳周溝のイメージを変える新発見となりました。

立柱出土状況

円盤状木製品　蕨手形木製品　棒状木製品出土状況

円盤状木製品　蕨手形木製品　棒状木製品

木製品組み合わせ状況

使用法想定図

笠形木製品

奈良・平安時代

曲物や挽物をはじめ種々の生活用具が広く普及し、また、律令制の導入により国家（朝廷）の主導のもとに祭祀（儀式）が行われるようになり、地方でも人形や斎串などを使った祭祀場が発見されるようになります。

石橋条里制遺構（笛吹市）では、井戸跡から踏鋤が確認されており、井戸枠には円形曲物が使用されています。また、大変地盤が緩い湧水地帯に建てられた掘立柱建物の柱穴からは、2枚の礎板が出土し、建物が沈みこまないように礎板を置き、柱を建てたものと考えられます。その土地柄に暮らす先人の知恵が支えた建物であったと言えます。

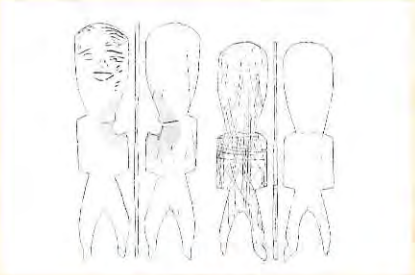
井戸枠（円形曲物）

踏鋤

礎板

塩部遺跡（甲府市）では、9～10世紀にかけての旧河道と溜池跡から人骨や獣骨、桃・クルミなどの種子や堅果類とともに挽物漆椀、曲物、人形、斎串などが出土しており、雨乞いなどの祭祀場として利用されていたと思われます。律令祭祀期遺物として人形が、2体出土しており、スギ板を削って作られています。左の人形は縦40cm最大幅9cm厚み8mm、右の人形は縦36.5cm最大幅8.5cm厚み8mm程の大きさで、平安時代の旧河道から、2体が頭を向かい合わせるようにして出土しました。左の人形には墨書の顔と左肩部分に焦げ跡が、右の人形には多数の刃物によるものと思われる傷が見られます（左の人形の顔は、出土してすぐに消えかかっていた墨の痕跡を赤外線ビデオカメラによって読み取りました）。災いや穢れ・病などを祓うための祭祀に使用され、焼かれたり傷つけられたりされたものと思われます。県内での人形の出土例は、13世紀代の大師東丹保遺跡（南アルプス市）や二本柳遺跡（南アルプス市）などで確認されています。斎串は36点出土し、そのほとんどが三角柱状もしくは角材状の形態を持ち、先端部が炭化しており、「聖なる木」を火で焼き浄めたものと考えられます。人形や斎串などの都市からもたらされた道具類は、都での新たな祭祀の風習を伝えています。

人形



人形実測図

斎串

中世

漆器や曲物などの食生活具をはじめ下駄や櫛などの服飾具など木製品の出土例が多くなります。祭祀具の公的性格はしだいに薄れ、庶民レベルのまつりにおいても人形などが広く用いられるようになりました。

二本柳遺跡（南アルプス市）では、戦国時代寺院の墓域から、木棺墓2基が発見され、板材を組み合わせその中に遺灰と遺骨を埋納した施設で、内部からは稲穂を乗せたかわらけ2点・銭貨6枚・数珠と考えられる植物の種子（ボダイジュ）が出土しました。元興寺極楽坊（奈良市）所蔵の「入棺作法」に記載された内容に類似した点が多く、中世の葬送儀礼を知るうえで極めて重要な、全国的に見ても類例の少ない資料といえます。寺院にかかわりの深い人物が葬られていることが想像できます。1号木棺を構成する板材と2号木棺から出土した呪符木簡には、梵字や真言密教の偈文が墨書されていました。この他に平安～鎌倉時代の人形、鏃形木製品、笛、火切り臼や弥生時代の梯子なども出土しています。

1号木棺出土状況

1号木棺内遺物出土状況

呪符木簡

鏃形木製品

笛

火切り臼

梯子

大師東丹保遺跡（南アルプス市）では、多くの木製品が出土しています。**網代**は、『一遍上人絵伝』や『法然上人絵伝』などの鎌倉時代の絵画資料に見える網代垣や網代壁に共通するものと考えられ、非常に貴重な資料と言えます。また、水害から水田を守る護岸施設などに使われた**杭列**が発見されています。なかには洪水で斜めに傾いた杭を再度建て直している状況も確認され、水害と共に暮らす人々の暮らしぶりがうかがえます。出土した木製品には、**漆椀・皿、箸・しゃもじ**などの食事具、**曲物**などの容器、**糸巻きの横木**などの紡織具、**下駄、草履、櫛、扇子**

網代

杭列（建て直された状況）

挽物漆塗椀出土状況

などの服飾具、**呪符木簡、斎串、人形、手鏡、陽物**など祭りやまじないに使う道具がありました。特に漆椀は、発掘調査の時、漆のウリ類（カボチャとスイカか）の模様がとても鮮明で、７００年前当時に使われたままのような状態でした。これらの木製品は、私たち現代人が使用している金属やプラスチック製のものと比べて見ても木を材料としているだけで、用途などに大差のないことが分かります。

小井川遺跡（中央市）では、戦国時代末期（約450年前）の**寺院**（基壇の縁が東西18m×南北13m）が発見され、多くの**建築部材**と**挽物漆椀**や**箸**などの生活用具が出土しました。

挽物漆塗皿

しゃもじ

曲物

紡織具

櫛

下駄

草履

芯扇子

呪符木簡

人形

手鏡

陽物

寺院の礎石 検出状況 小井川遺跡

建築部材 小井川遺跡

挽物漆塗椀 小井川遺跡

江戸時代

漆器(しっき)や結物(ゆいもの)（桶(おけ)・樽(たる)）などが生活に浸透(しんとう)し、また上水道への敷設など都市化に伴って木製品が広く利用されています。

町屋口遺跡（増穂町）では、江戸時代の農道「作場通ひ道（さくばかよいみち）」が発見され、この道を補強する土留め用(どどめよう)の板として富士川舟運(ふじかわしゅうう)で使われたであろう舟板(ふないた)が確認されました。また、船出の安全祈願を行ったものとも

土留め用板（舟板）

舟形木製品

竹樋

竹樋出土状況

考えられる舟形木製品(ふながたもくせいひん)も出土しています。

鰍沢河岸跡（鰍沢町）では、石垣に沿った形で竹樋(たけひ)が見つかりました。竹樋とは、竹で作られた水を通す管（水道管）のことです。甲府城下町などでは様々な場所で木樋(もくひ)（木で作られた水道管）が見つかっており、上水道が発達していたと言われています。

甲府城下町遺跡（43 街区地点）では、江戸時代の山梨の政治的中心地であった甲府城の周辺に広がる都市遺跡で、江戸時代の武家屋敷や武田時代の城下町が確認され、井戸跡などから木製品が発見され、中には板材を製材中の残材

残材

前挽き鋸で縦挽きする様子（富嶽三十六景 遠江山中 葛飾北斎）

甲府城跡 狭間

なども見られます。

甲府城跡は、県内に唯一築城された近世の城で、公園整備事業などに伴う発掘調査により、胴木(どうぎ)や狭間(はざま)などの木製品も発見されています。胴木は、堀底からはしご状に組まれた数十本の松丸太が検出され、石垣を築く時にその基礎となるだけではなく、積んだばかりの石垣が自重で沈む際に 石材が不等沈下したり、石垣全体が同時に前面へ滑りだすのも防ぐ重要な役割を担っています。狭間は、塀(へい)や櫓(やぐら)などに開けられる三角形や四角形をした小窓で、木製の枠が使われていました。

日向町遺跡第２地点（甲府市）では、甲府城下の武家屋敷に伴う５段の桶を積み上げた深さ 5m におよぶ井戸が発見され、その中から下駄や節が抜かれた竹が出土しています。日本人は、昔から井戸は「カミがやどる聖なる場」と考えていたため、井戸を埋めるとき、井戸の中にカミが閉じ込められることをおそれ、カミの息の根を止めないように竹を突き立て、できるだけ早く井戸から抜け出してもらうように願い、カミのはきものとされる下駄を投げ込んだと考えられています。この他に将棋駒と猿人形の遊具や、ひしゃく、和傘の部材などの日常生活品も井戸から数多く出土しています。

井戸跡

下駄と竹

将棋駒

猿人形

ひしゃく

傘部材

おわりに

今日、私たち現代人は、地球温暖化による環境問題など大きな壁に突き当たっています。今後、新たな時代を切り開いていくためには、改めて森林の力を学び、森林と付き合ってきた先人たちの生活様式の中にある知恵や森林が育むさまざまな恵みを探りながら、生活を再構築していくことが必要ではないでしょうか。

活用事業に向けて

山梨県埋蔵文化財センターでは収蔵管理している資料の中で、活用度の低かった資料について再整理を行い、学校などでの地域学習に役立て、埋蔵文化財の積極的な活用を進める「埋蔵文化財学習活用事業」を平成 17 年度より文化庁の補助金を受けて実施しております。

平成 21 年度は、昨年度までの「土器」に引き続き、「木製品」を取り上げ、体験学習用の復元品や貸出・収蔵専用ケース作成などの事業を行っております。

木製品の実物資料や体験学習用の復元品などの活用を通して、土器や石器だけでは解らなかった昔の人々の歴史に触れ、また今日確実に失われつつある森林資源や環境問題を考える一つの材料として活用いただければと思います。

出前授業用展示台

体験学習用復元品（竪杵：油田遺跡　又鍬：身洗沢遺跡）

お問い合わせ

山梨県埋蔵文化財センター
〒400-1508　山梨県甲府市下曽根町 923
TEL 055-266-3016 / FAX 055-266-3882
ホームページ http://www.pref.yamanashi.jp/barrier/html/maizou-bnk/index.html